

1 学力向上の取組み

研究テーマとテーマ設定の理由

◎ 学対目標・取組み事項

目 標 : 生徒一人一人に確かな学力などの生きる力を育む		
基本方針		
<p>○「確かな学力の定着」「豊かな人間性の育成」「健康・体力の育成」「基本的な生活習慣の形成」に係わる事項について取組の充実を図る。</p> <p>○各学年で身につけるべき内容を確実に定着させる取組みの充実を図る</p> <p>○学校・家庭・地域社会が連携協力して日常的な取組充実を図る。</p> <p>○マネジメントサイクルに基づき、実効性のある学力向上対策の取組の充実を図る。</p>		
取 組 事 項		
(1) 確かな学力の定着	(2) 豊かな人間性の育成	(3)健康・体力の育成
<p>①基礎・基本の定着</p> <ul style="list-style-type: none"> ・少人数授業の充実 ・学力強化月間の充実 ・朝読書・読書活動の充実 ・家庭学習の促進 ・到達度テスト等の結果をふまえた教科指導の継続「学年のたすきリレー」 ・指導と評価の一体化 ・問題解決力をはぐくむ授業の工夫 <p>②学習を支える力の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ベル席の徹底・教室ルールの設定 ・授業充実度指数の定期調査 ・家庭学習の習慣化 	<p>①集団づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学級プログラム委員会等で学級集団の集団決定と集団実践を促進する。 ・学校行事の充実を図り、集団の凝集性を高める。 ・職場体験や地域行事をとおした人間関係形成能力や目的意識の高揚 <p>②心の教育</p> <ul style="list-style-type: none"> ・この時この場で何をなすべきかを考えさせ、実践させる自己指導力の育成 ・道徳教育・人権教育の充実 ・教育相談・生徒指導の充実 	<p>①保健に関する取組</p> <ul style="list-style-type: none"> ・防煙教室・思春期教室・エイズ教育の実施 ・食に関する教育の充実 <p>②体力づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科体育の指導方法の工夫 ・部活動の活性化 ・夏休みの体力向上の取組み <p>③危機回避能力の育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実践型避難訓練の実施
基本的な生活習慣の形成		
<p>①生活リズムの確立</p> <ul style="list-style-type: none"> ・遅刻0運動の推進 ・家庭と連携した「早寝・早起き・朝ご飯」の奨励 ・家庭での静かな1時間の奨励 	<p>②規範意識・マナーの育成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あいさつ運動の実施 ・人権教育・道徳教育の充実 ・整理・整頓や公共物を大切にす指導 	

◎ 校内研 テーマ・テーマ設定の理由

1 研究テーマ

学習意欲を高めるための指導と評価の工夫
～「教えて考えさせる授業」の創造をめざして～

2 テーマ設定の理由

本校では、平成 18 年度から、生徒一人一人の「生きる力」を育成するためには、問題解決力を育むための授業作りが重要ではないかと考え、全職員で取組んできた。その結果、多くの生徒が落ち着いた雰囲気の中でじっくりと課題に取り組むようになり、学習を支える力が育まれ、その成果が多方面に表れるようになってきた。昨年度は、生徒一人一人の学習状況を適切に把握した指導と評価の一体化を進め、問題解決的な学習を通して個に応じた指導を実現することに努めた。その結果、生徒の学習意欲をひきだす

ことで主体的な学習態度を育み、「わかる授業」「参加する授業」実現のための実践が行われた。

そこで、本年度は昨年度取組んだ「指導と評価の工夫」を踏襲しながらサブテーマを「教えて考えさせる授業」の創造をめざして とすることで授業の流れを、『基礎基本の習得と定着を、形成的な評価の活用で図り、さらに生徒の相互説明や教え合い活動を通して理解の広がりと学び合う雰囲気作りを図る。また、理解を深める課題を工夫し、問題解決能力を育て、授業の終末には授業評価・自己評価を工夫し次時へつなげる。』という形で取組んでいきたい。

このような指導と評価の工夫を通して基礎基本の定着が図られることにより、本校の課題のひとつである『活用能力の向上』に結びつけることができるのではないかと考え、本テーマを設定した。

3 研究目標

各教科において、教科の特性を活かしながら学習意欲をひきだしていくひとつのモデルとして「教えて考えさせる授業」について検討していく。さらに、授業における評価・指導の過程を工夫・実践することで、問題解決力のさらなる向上をめざす。

4 研究の仮説

上記のような授業モデルを実践する中で、生徒個々の学習状況を適切に把握するための形成的な評価を行い、授業の終末で授業評価や自己評価で学習内容の確実な理解と定着を図ることにより問題解決力や活用能力を育むことができ、生徒の学習意欲を高めることができるであろう。

5 研究内容

- (1) 各教科部会を中心に、1時間の授業の中で「形成的な評価」、「総括的な評価」をどう行うかを工夫し、授業の展開の仕方を改善して「教えて考えさせる授業」を創造する。
- (2) 教科毎に 校内授業研を年間で1人 3回実施 して、授業提案 等について協議し、基礎基本の定着と学習意欲を高めることに有効であるか検証する。
- (3) 基礎基本の定着が確実に図られているかを自己管理するための週案等の活用の工夫を行う。
- (4) 授業の予備時数が少ないなかで、教科書の内容をゆとりをもって確実に指導ができるように年間指導計画の見直しを行う。同時に、評価計画の見直しや、習得や活用につながる生徒自身の自己評価表の工夫を行う。

6 研究体制について

- (1) 校長、教頭、教務、研究主任で構成する校内研修推進委員会（以後、推進委員会と略称）を設置する。
なお、研修内容と関連する校務分掌の担当職員を含め検討することもある。
- (2) 研究主任は、本校の校内研修の責任者として学校外の担当者会(研究主任研修会等)に参加する。
- (3) 研修の全体計画や進め方について、研究主任が作成し、推進委員会で検討する。
- (4) 推進委員会は、校内研修が円滑に行えるように、教科部会の活動の調整や、諸活動のバックアップを行う。
- (5) 学力向上推進委員会との役割分担を明確にし、その上で互いに連携し、教育課題の解決に取り組む。

